

氏名	西野 範子
生年月日	
本籍	
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	人博乙第6号
学位授与の日付	平成24年3月22日
学位授与の要件	論文博士(学位規則第4条第2項)
学位授与の題目	考古学と民族学研究からみたベトナム陶磁史 —李朝期から現代まで— (History of the Vietnamese Ceramics based on the Archaeological and Ethnological Studies: from the Ly Dynasty Period to the Present)
論文審査委員	委員長 高濱 秀 委員 藤井 純夫, 中村 慎一 西本 陽一, 鏡味 治也

学位論文要旨

本論文では、ベトナム最初の長期安定王朝となった李朝期(1009-1225年)から現代までの1000年に亘る陶磁史を研究の対象とし、ベトナム施釉陶磁器の変遷や文化的歴史的背景を論ずる。

ベトナムは、東南アジア諸国の中で最も中国の影響を強く受けた土地であり、「東南アジア」だけでなく、「東アジア」の枠組みに所属させられることも多い。また、ベトナム北部は北接する中国からの情報を最も入手しやすい立地でもあった。しかし隣接するが故にベトナム北部は、紀元前180年頃南越に支配され、938年の呉権による独立まで中国の支配下に置かれた。その後、独立を果たしたが丁朝や前黎朝は短期間しか続かず、李朝期より初めて安定した王朝が確立されたと言える。本論文が、李朝期以降を対象とするのは、李朝期にベトナムが政治、文化のあらゆる面で独自性を発揮したであろうと考えられるからである。中国陶磁技術の影響も考慮しながら、ベトナム国内における内的な陶磁史の変遷を論じた。

研究方法

李朝期から20世紀までの陶磁器の分類と編年案は、既に西村昌也・西野範子(2005)「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年-10世紀以降の施釉碗皿を中心に-」(『上智アジア学』23号:81-122)において発表しており、本論では当研究を基盤とし、新たな分析方法や資料を加えて、新たな結果を導き出した。考古学的資料からの分析を中心とする1930年以前においては、各王朝期に分け、分類・編年研究を行った。その編年案を応用して、日本で伝世および出土したベトナム陶磁について分析し、各時代における流通の背景などを明らかにした。

現代から過去に遡り復元可能な時代に関しては、窯業村で民族学的調査方法を応用しながら、陶器および陶磁器の各生産工程の技術を明らかにした。さらに、古老への聞き取り調査が可能な1930年代から現在までの陶磁器の技術的変遷およびその社会的歴史的背景を提示した。17世紀から20世紀の陶磁器の変遷については、民族学的研究から明らかになった20世紀陶磁器生産技術から遡って分析・研究を行った。最後に、考古学的視点と民族学的視点

の両方からの視点により、同じ陶磁器の観察・分析を行い、痕跡と技術の関係について明らかにした。また、生活調査から陶磁器使用についても明らかにした。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章において、ベトナム陶磁を巡る研究目的、研究史、研究方法について説明した。

第2章では、陶磁出土例が非常に少ないために研究が進まなかった李朝期(1009～1225年)陶磁について論じた。当該時代は今まで李朝期と陳朝期(1225～1400年)の陶磁器の分期があいまいに研究されてきた。よって、筆者はまず李朝陶磁を抽出するため、10世紀の資料及び陳朝期初頭の資料を示準資料とした。李朝期陶磁の候補となる資料について、陶磁器の型式、文様、窯詰め技法および類似する中国陶磁から分析し、李朝期の編年案を作成した。李朝期陶磁器の特徴は、李朝最初期に非常に上質な白磁と青磁を生産し、年代が下るに従って、文様や器形が鈍る傾向があり、それが陳朝期にまで続くことが明らかになった。また、李朝朝廷が使用するような上質高級な緑釉陶器をキムランで生産している可能性が高いことが分かった。

第3章では、ナムディン省出土の陳朝期(1225-1400年)碗皿の分類と編年研究を行った。高台型式、重ね焼き技法の組み合わせを分析し、高台型式の繋がりから順序を決定した。ナムディン・バッコック遺跡の出土層位と、コンチェー、コンティン、デンチャン、バイハランの各遺跡の存続年代と採集陶磁器を分析し、陶磁器の各型式の年代的前後関係を明らかにした。また壺岐、対馬出土資料の早い年代を持つものを1350年頃と設定して、陳朝期を6期に区分した編年案を提示した。

第4章では、キムラン、バイナムゾン遺跡で出土した陶磁器の製作技術の分析を行い、中国陶磁との比較から中国陶磁の摸倣のあり方を検討した。中国耀州窯系陶磁を摸倣したベトナム陶磁と、中国の各窯における耀州窯系陶磁を比較し、また広西省興安県巖関窯との関連性の強さを指摘した。

第5章において、タインホア省のヴィンロック県の胡朝城採集遺物と、キムラン・バイナムゾン遺跡R1遺構出土遺物とを比較して、14世紀初頭の陶磁器についての年代観を明らかにした。

第6章では、今まで「14世紀後半から15世紀前半」と位置づけられてきたベトナム鉄絵、青花について再検討を行った。14世紀から15世紀前半にかけて、バイナムゾン遺跡を中心とし、ベトナムの諸遺跡、太宰府、博多、琉球、マレーシアで出土した鉄絵、青花碗資料の型式分類を行い、形式的順序より編年案を提示し、陶磁器に描かれた文様の分類と変遷過程を明らかにした。また、キムラン、バイナムゾン遺跡における14世紀後半に位置づけられる盤の文様と、沖縄首里城二階殿遺跡の碗皿以外の器種の文様から、青花の初期段階の文様を明らかにし、15世紀後期に位置づけられているホイアン沖沈船出土資料の青花陶磁までの、青花文様の変遷と年代観を提示した。

第7章では、ベトナム国外に輸出されたベトナム陶磁に関して、日本出土及び伝世資料を中心に分析した。一つは、ベトナム陶磁の中でも茶陶として扱われる資料を取り上げ、伝世資料と茶陶と考えられる考古学的資料を包括的に分類し、生産年代を比定した。その結果、ベトナム産茶陶の生産年代を、14世紀、15世紀、16世紀前半、16世紀第3四半期、第4四半期、17世紀前期に分期し、各時期に関する茶陶がもたらされた国際交易の背景について明らかにした。朱印船貿易時代には、日本からベトナムへの注文生産が行われていたことが確実で、注文生産の仲介役に和田理左衛門が関わった可能性について文献史と考古学的視点から論証した。次に、九州出土のベトナム陶磁に焦点をあて、14世紀半ばから17世紀後半までの国際交易の背景について、陶磁器の出土分布と年代観から明らかにした。14世紀半ばの倭寇による流通、15世紀の琉球を中心とした国際交易ルートと薩摩の関係、16世紀前

半から後期和寇が流通を担った可能性を指摘した。また、16世紀第三四半期には、大分大友府内のみから多くのベトナム陶磁器が出土することから、大友宗麟が独占した交易ルートにより、おそらくはポルトガル船が運搬した可能性を指摘した。

第8章で、ナムディン省バッコック集落におけるフーコック地点とソムB地点での発掘調査出土資料を用いて、17世紀から20世紀に至るまでの陶磁器の変遷を明らかにした。バッコック集落の資料は、層位が安定しており、層位学と出土碗皿の型式学的分類からの年代観が明らかにできた。

第9章および第10章では、現在も窯業活動を行っているベトナム窯業集落に焦点を充てて民族学的調査および民族考古学的調査の結果を論じた。ベトナムがフランスによる植民地支配、その後の戦争や社会主義化、さらにドイモイ以降の急速な経済発展という政治経済的な変化を経験するなかで、窯業村における手工業生産をめぐる組織的、技術的、経営的諸側面がどのように変化していったかについて聞き取り可能な1930年代から21世紀初頭の時間枠で論じた。この70年余りの間に、原材料、生産技術、生産のための組織構造を変化させながら、フーラン村やバッチャン、キムラン村で窯業は続いてきた。また、流通と生産の関係にも注目し、フーラン村落内から他所へ移住する世帯を調査し、窯業を廃業する要因とその構造を明らかにした。同じバックニン省内の手工業集落チャンリエット村（廃業回収とその再生）、ドンホー村（版画製作）における研究と比較し、手工業生産体系の変化に基づいて、フーラン村の独自性を明らかにした。

民族考古学的分析の試みとして、痕跡と生産道具の関連性について論じた。今まで遺物の痕跡を分析する際、「撫で」、「削り」、「磨き」などのあやふやな根拠での記述が多かったが、布による撫で、手の指による撫で、貝殻を使用した成形痕、竹棒を使用した削りなど、ベトナム陶磁器から製作技術痕を明らかにした。

第11章で、陶磁器を考古学的視点と民族学的視点の双方で観察・分析した。陶磁器生産地バッチャン・キムラン村採集遺物を考古学的に分析し、遺物から理解できた観察事項と、バッチャン・キムランの聞き取り調査から理解できた製作技法との相関関係について分析した。また、陶磁器の使用法についても分析した。ベトナム北部各地における陶磁器の使用事例を分析し、ベトナムの食器は、各自用の飯茶碗の他、おかずを盛りつけるための皿（1皿もしくは2皿）、そして汁を入れる大碗という3種の陶磁器が最低必需品あることを理解した。その上で、これらの食器利用が少なくとも18世紀までには遡ることを明らかにした。

最後に、まとめとして、李朝期から現代までの陶磁器を俯瞰し、その技術の画期を明らかにした。

第一の画期は、李朝期前期に、白磁や青磁の生産が開始されたことである。丁朝や前黎朝とは、全く異なる新しい技術をもって生産されており、その技術が、人的移動によりベトナムにもたらされた可能性を指摘した。また、第4章で明らかにしたように、13世紀広西省の窯業の影響を強く受けていることから、李朝期においてもベトナムと近い立地の各窯との交流を中国側の各生産窯址の技術と比較する必要がある。そして、陳朝期陶磁の成形技法、施文技法、窯詰め技法が李朝期陶磁のそれを引き継いで生産されていることを明らかにした。つまり、王朝は交代したが、陶磁器生産体制や陶工が引き継いでいた可能性がある。西村・西野2005でベトナムでは王朝交代に伴い技術革新が行われるということが多いことが指摘されているが、李朝期から陳朝期において革新はなかった。第二の画期は、青花の出現であり、陳朝期の半ばである14世紀前半より出現し、14世紀の末には、非常に上質の輸出用陶磁のレベルの青花盤などを生産している。第三の画期は、胡朝期（1400-1407年）に「輪状の釉剥ぎ」という重ね焼き技法が出現している。そして、第四の画期は、ハイズオンにおいて15世紀前半に上質な青花陶磁が生産されたことである。それらが属明期（1407-1427

年)に相当する可能性がある。黎朝期になっても、引き続き青花は生産されているがその中心はカオリンの採取できるハイズオン省であり、大量の陶磁器が輸出され、「ハイズオン勢力」と呼ばれるほどの黎朝に対抗する大きな勢力となっている。そして、第五の画期は、第17世紀後半から18世紀であり、ベトナム陶磁器において高級品生産が目指されなくなる時期である。同時に、粘土の枯渇か、灰白色の胎土から、灰色や赤色に発色する胎土となる。以降、食器においては、国内市場向けの雑器を中心に生産し、それが20世紀まで続く。そして、第六の画期が、1959年の社会主義経済の下で、17世紀から20世紀初頭まで変化しながらも続いてきた生産技法が途絶え、モンカイ窯系の中国陶磁の生産技術に集約されたことである。それが変化しながら現代まで続いている。また、社会主義経済時代の各集落の独自のシステム作りを分析することで、「王の法も村の垣根まで」といわれるようなベトナム集落の強固性について明らかにした

Abstract

The purpose of this thesis is aimed to reveal the historical transition of the Vietnamese ceramics from Ly Dynasty (1009-1225) to the present. Two disciplines have been used for analyzing the transformation of ceramics. At first, based on the archaeological studies, I classified ceramics assemblage from a viewpoint of the making techniques and morphologies then set up chronological sequence from Ly dynasty to the present in detail. The second, I carried out the ethnological researches on the ceramics-producing village to reconstruct recent-past history of manufacturing process and techniques. Furthermore, based on the interviews with the old folks in the villages, it can be pointed out that several historical events such as colonization, the war against French and the socialism revolution were deeply connected with transitions of the ceramic manufacturing system. Finally, I explore the historical context of the Vietnamese ceramics during the last 10 centuries. The epoch of transition can be pointed out as the following. 1) The transparent glaze and celadon glaze appeared in the Early Ly Dynasty, 2) Production of blue and white ceramic commenced at the latter half of Tran Dynasty, 3) Innovation of stacking technique occurred during Ho Dynasty, 4) The peak of Ceramics technic came out in the early 15th century, 5) The ceramic quality decayed from 17th to 18th century, 6) Traditional Vietnamese manufacturing techniques substitute the so-called "Mon Cai" production technique from 1959 under the socialist revolution.

論文審査の結果の要旨

西野範子氏の博士論文は、ベトナムの李朝期から現代までの陶磁器を包括的に扱ったものである。李朝期以降の陶磁器を考古学的手法で編年を行うことによって研究するとともに、一方では現在生存している陶工に聞き取り調査を行うことにより、現代から1930年代にまでさかのぼって陶磁器産業の復元を行う。そして両者を結合することにより、李朝期から現代までの陶磁器の全体像を描こうというのが、西野氏の研究方針である。

氏は碗と皿の型式分類を中心に据えて、ベトナム陶磁器を考えた。李朝期陶磁の編年の基礎としたのは、焼成の際の重ね焼きの痕跡や高台の形である。陳朝期の陶磁については、政治権力の中心である「天長府」の銘のあるものや、コンチュー・コンティン窯址群、バッコック遺跡などの出土資料と共に、日本九州の博多、太宰府などから出土した資料も使用されている。製作過程・技法、施文方法などからの分析により編年が行われた。次に中国元代の青花陶磁器との関連で語られることの多いベトナムの初期鉄絵・青花陶磁器についても、ベトナム陶磁器の体系の中で、重ね焼きの方式やそれに関連する高台の形、および文様変遷から編年を考察している。これは評価できる研究態度であろう。またベトナムから輸出された、日本出土あるいは伝世のベトナム陶磁について考察するとともに、バッコック遺跡の発掘結果から、17世紀から20世紀におよぶベトナム陶磁について論じている。このような考古学から述べられたベトナム陶磁器の編年は、現在のところ最も完備したものといえよう。

一方、ハノイ近郊のキムラン集落・バッチャン集落、およびベトナム北部バックニン省フーラン村において行われた参与観察や聞き取り調査の成果が、民族学による成果として提示される。キムラン集落は施釉陶磁器を生産する村であり、グエンヴィエットホン氏一家の窯業技術が観察・調査された。フーラン村は、千年間陶磁器を作ってきた村であるが、現在でもその窯業は維持されており、特に日用雑器である大型陶器の製作で知られている。1930年代にさかのぼる窯業技術の詳細、フランス植民地時代以降の窯業技術や生産システムなどの変化、そして政治や社会の変遷が窯業に与えた影響なども述べられている。これらの民族学的調査の成果は、現在では貴重なものといえよう。

最後の章は、考古学による観察と民族学の成果を付き合わせたもので、主として陶磁器製作の技術に関して明らかになったことを述べている。これは考古学の方法について寄与するところも多いと考えられる。

以上、西野氏の論文は博士の学位に十分値するものと審査員全員の意見が一致した。